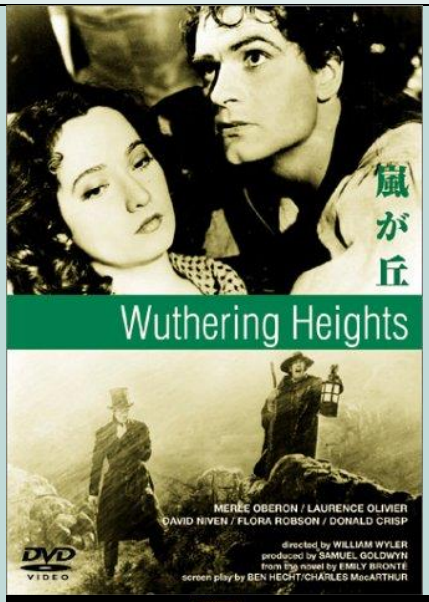
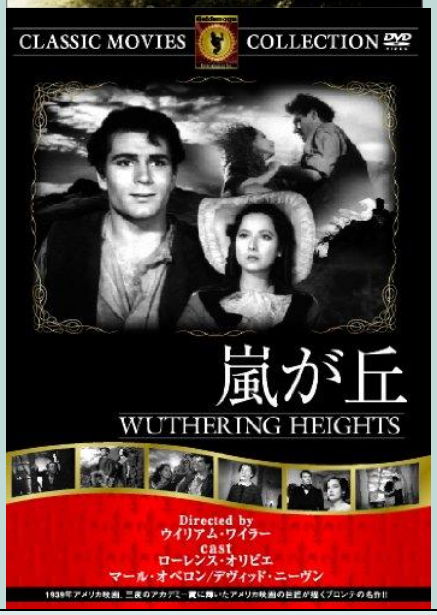
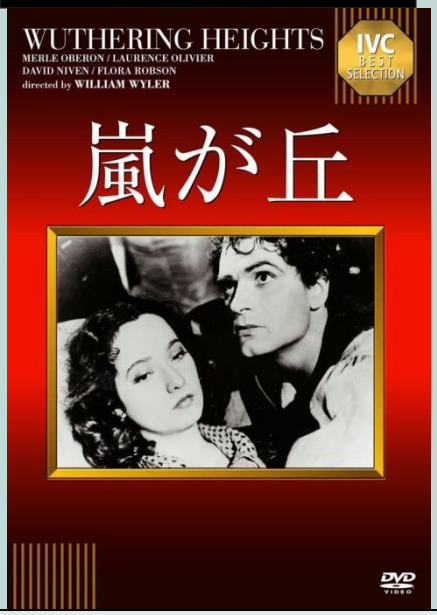
『嵐が丘』　原題 *Wuthering Heights*　1939 年	執筆：清水　純子
制作国	アメリカ
スタッフ＆キャスト（監督、脚本家、俳優、その他）	スタッフ：監督ウィリアム・ワイラー / 脚本チャールズ・マッカーサー、ベン・ヘクト/ 製作 サミュエル・ゴールドウィン/音楽 アルフレッド・ニューマン/ 撮影グレッグ・トーランド/ 編集 ダニエル・マンデル/ キャスト： マール・オベロン：キャシー / ローレンス・オリヴィエ: ヒースクリフ/ デヴィッド・ニーヴン: エドガー・リントン/ ジェラルディン・フィッツジェラルド: イザベラ・リントン/フローラ・ロブソン:エレン・ディーン/ヒューゴ・ウイリアムズ: ヒンドリー・アーンショー/ ドナルド・クリスプ:ケネス医師/
画像	  
カラー・モノクロ	モノクロ
時間	103 分
ストーリー	19 世紀初頭、嵐の晩にロックウッドは、「嵐が丘」と呼ばれる古い豪邸に迷い込み、不愛想な大男ヒースクリフを見る。開かずの間で休むロックウッドは、外からヒースクリフを呼ぶ亡霊キャシーの声を聞いておびえて眠れ

	ない。女中のエレンは「嵐が丘」邸にまつわる過去の物語を話し出す。 　「嵐が丘」の先代の主アーンショウ氏は、息子ヒンドリーと娘キャシーがいたが、得体の知れないジプシーの男の子を町で拾い、ヒースクリフと名付けて我が子同様にかわいがるが、子供たちの成長を待たずに病死する。後を継いだヒンドリーは、ヒースクリフを憎んで下男に格下げして虐待するが、キャシーはヒースクリフと恋仲になる。しかしキャシーは上流階級の金持ちのエドガー・リントンに求愛される。傷心のヒースクリフはアメリカに去り、成功して帰国し、アル中で没落していったヒンドリーから嵐が丘を買い取り、リントン夫人になったキャシーの前に現れる。キャシーを取り戻せないことを知ったヒースクリフは、キャシーの義妹イザベルを誘惑して結婚し、虐げる。キャシーはヒースクリフの愛を捨てることができず、苦しみ、病になる。医師を呼びに外出した夫エドガーの隙を見て忍び込んだヒースクリフは、キャシーを抱きかかえて思い出のペニストーン丘を見せながら最後の時を共に過ごす。 　ヒースクリフはキャシーの死後、運命を呪いながら生き延びるが、ロックウッドの話を聞いて嵐の夜に外へ飛び出し、ペニストーンの丘で凍死する。村の人々は、ヒースクリフがキャシーと一緒に原野を彷徨う姿を見るが、後に残された足跡は、ヒースクリフ一人のものであったという。
時代設定	19 世紀初頭（1801 年）から４０年前の過去にさかのぼる。
場所	イギリスのヨークシャーの荒涼たる館「嵐が丘」
社会背景	原作である小説『嵐が丘』の成立は、ヴィクトリア朝(1830~1900)の 1847 年産業革命のイギリスである。都市と農村の隔絶、価値観の多様化、人間による自然の制服と機械化、地主と小作人の階級差。男子相続の家父長制、女性の経済的社会的依存性が存在し、結婚だけが女性の生きる糧だった。
文化的背景	産業革命以降のイギリスでは富の拡大に伴って、識字率が上がり、小説が流行。女性読者の増加と共に女性作家が誕生。産業と科学の進歩と共にキリスト教への懐疑、無神論が秘かに浸透、既成の価値観やモラルへの疑問が生まれる。女性は家長である男性の家に付属し、女性の自立は存在しなかった。
使用言語	英語
テーマ	永遠の愛、階級や人種などに対する当時の社会的良識や規制に阻まれて真の愛を貫けなかった男女の無念さ。
みどころ	社会的経済的体面に阻まれて、真実の愛を貫けない女性の悲劇、19 世紀イギリスの人種・階級・ジェンダーの枠組みを超えられず、正直に生きられなかった恋人たちの悲哀と後悔。
印象深いせりふ	Heathcliff: What do they know of heaven or hell, Cathy who know nothing of life? Oh, they're praying for you, Cathy. I'll pray one prayer with them. I repeat till my tongue stiffens: Catherine Earnshaw, may you not rest so long as I live on. I killed you. Haunt me, then. Haunt your murderer. I know that ghosts have wandered. Be with me always. Take any form.

	Drive me mad. Only do not leave me in this dark alone, where I cannot find you. I cannot live without my life. I cannot die without my soul. Oh, Cathy. Oh, my dear. I can still see and hear that wild hour...
授業教材用 メリット	演出も役者たちの演技もすばらしい。昔の映画なのに十分楽しめる。世界的名作の優れた映画化である。英語もすばらしい。
授業教材用 デメリット	ヒースクリフに対する人種偏見と階級的差別が日本の学生にはわかりにくく、この点抜きではキャシーとヒースクリフと結ばれない理由が理解できない。原作にある場面の多くが省かれている――ヒースクリフがキャシーの墓を暴く場面、キャサリンの死亡が産褥によること、キャサリンの娘とヒースクリフの息子リントンの結婚など後半部分が描かれていない。
映像入手元	アイ・ヴィ・シー/20 世紀 フォックス ホーム エンターテイメント/ ファーストトレーディング/ IVC,Ltd./
原作の有無	エミリー・ブロンテ『嵐が丘』
支持反応	Rotten Tomatoes 評価（批評家 100 、観客 85 ）
キーワード	愛、復讐、亡霊、ゴシック、アンチクライスト、館、階級、人種、ヒースの原野、富、貧困、婚礼、死、過去、回想、家父長制、ジプシー、無神論、アメリカ。

Copyright © Junko Shimizu All Rights Reserved.

★本サイトに掲載される情報の著作権は、清水純子に帰属します。

許可なく複製、改変、アップロード、掲示、送信、頒布、販売、出版等を禁止します。